

開学 30 周年記念特別企画「活字と歩んだ筑波大学の 30 年」③

「つくばスチューデント」のあゆみ

増尾 弘美

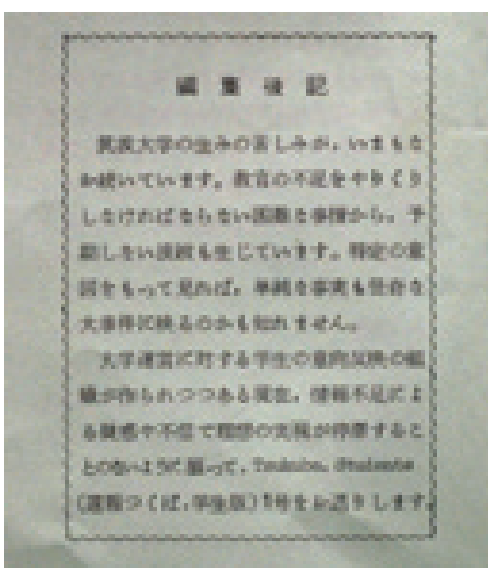
筆者は平成 12 年度から 2 年間、学生担当教官室員として「つくばスチューデント」(以下、「スチューデント」と略記)の編集・発行に携わってきた。任期中の最後に発行された 500 号記念特集号で編集長を務めたことから、本稿を執筆する次第である。

「スチューデント」のあゆみは、学生担当教官室(以下、学担室と略記)の歴史と重なる。筑波大学の開学は昭和 48 年 10 月であるが、その翌年の 11 月 29 日の評議会で「学生担当教官制」に関する規則が早くも決定、これと同時に学担室も準備され、昭和 50 年 4 月には学生担当教官の発令となった。これは全学的な学生組織を「クラス制度」を母体に作り上げ、大学運営にあたって学生との意思疎通を図ろうとする画期的な試みである。「筑波大学の建学の精神およびそれにもとづく本学の研究、教育等の在り方を十分に理解」してもらうことを目的として、「スチューデント」(当時は「Tsukuba Students」)第 1 号(B5 版、6 頁)は、同年 5 月 19 日に産声をあげた。同年 2

月、既に「速報つくば」を発行していた企画調査室より、「速報つくば」のブルー版(学生版)という位置付けで発行された。当時、企画調査室員であった高橋進名誉教授が初代学担室長となり、「スチューデント」の産みの親となる。本紙が企画調査室から独立し、現行のような学生部発行となるのは、発刊の翌年の昭和 51 年のことである。

歴史的に見ると、大学における学生向けの広報活動の発端は、大学紛争にある。一部の学生の主張や宣伝に振り回されることなく、一般学生に大学の真意を正確に伝えることを目指して、その後ほとんどの国立大学が大学と学生とのコミュニケーションの手段として広報紙を発行するようになった。しかしタイムリーな情報を提供することを目指して、長期休暇中を除いた隔週木曜発行(年間 20 回)というこの頻度の多さは本学独自のものであろう。このような努力の賜物か、昭和 63 年には「スチューデント」は国公立大学学内広報紙のうちの優秀広報紙として文部省から表彰された。しかし実のところ大学への学生の意向反映の理念が理解され、十全に機能し運用されるには長い年月を経なければならなかった。全学学類・専門学群代表者会議(全代会)が学生の意向反映の組織として機能し始めたのは、昭和 60 年代のことである。全代会議長の孤独な苦悩は「スチューデント」の行間からも読み取ることができる。「産みの苦しみ」もあったが、「育ての苦しみ」も確実に存在したのである。

誌名も英語表記は続いているものの、平成 2 年度からは「Tsukuba スチューデント」となり、平成 3 年度からは現行の「つくばスチューデント」へと変遷を遂げた。昭和の終りに、新治郡桜村からつくば市へと変わったことも影響しているのかもしれない。この頃の「スチューデント」は巻末に「インフォメーションつくば」が掲載されるな



「Tsukuba Students」第 1 号の編集後記

ど、今現在我々が目にしているものとほぼ同じである。発刊から16年、ちょうど元服といった年齢か。平成6年度からは学内の慣行に従い、B5版からA4版となった。こうして学生の意向反映の仕組みがプロパガンダの時期——満身の力を込めてその必要性そのものを説かねばならない時期——を越えて、空気のように馴染み、定着していったのである。担当副学長も平成10年度に厚生補導担当から学生生活担当へと、よりソフトな形に名称を変えた。さらに平成13年度からは本紙のPDF版も閲覧可能になり、広く学外にも公開されることとなった。内容も、初期の学術小冊子風のものから、今日の写真を多用したヴィジュアル系へと大きく変貌を遂げた。平成14年2月21日発行の500号記念特集号では、表と裏の表紙とその裏面、計4頁をカラー版とした。以降、年に数回、大学を撮影した写真を募集し、優秀作品を「スチューデント」の表紙にカラーで掲載することとなった。なおPDF版では毎号、全頁をカラーで見ることができる。

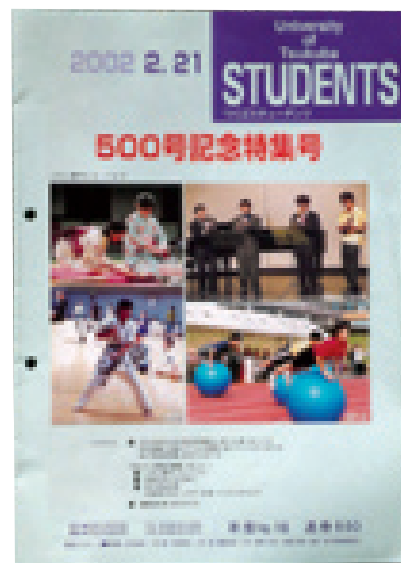
さて500号記念特集号では、一般学生の生の声を収録しようと、「これに夢中になってます」「筑波大学にももの申す」「私の筑波自慢」の3つのテーマを設定し、広く全学から原稿を集めることができた。ご尽力頂いた方々には、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。さて本号の表紙をめくると、筑波大学管弦楽団の写真がある。こ



「つくばスチューデント」第500号掲載の筑波大学管弦楽団

れぞまさに筑波大学ではないか。多種多様の学類・専門学群を配し、どの分野が一つ欠けてもこのような絶妙なハーモニーは生まれなかつたらう。平成15年度からはこれに図書館情報専門学群が加わり、さらに厚みと深みを増すこととなった。総合大学の強みである。本号は開学以来の大きな変革を控え、20世紀の総決算を示す形となった。図書館情報大学との合併前の、つくばの市外局番がまだ0298（オーつくば）であった時代の、学務システムTWINSが施行される前の、国立大学法人化前の、一つの節目を刻印した。平成14年春の早咲きの桜と共に、本号は学内に散っていった。法人化後には各所で美しい花を咲かせることを、今はただひたすら祈るのみである。

(ますお・ひろみ 文芸・言語学系助教授)



「つくばスチューデント」第500号記念特集号

「つくばスチューデント」編集：筑波大学学生担当教官室

発行：筑波大学学生部

中央図書館本学関係資料室に所蔵